

コラム

患者中心主義

慈恵医大付属病院の前身は明治 15 年に建てられた有志共立東京病院という慈善病院であった。設立当時の日本はまだ貧しく、医者にはかかれず死ぬしかない病人があふれていたのである。英国留学から帰ったばかりの高木兼寛は「東洋の文明の中心をもって任ずる帝都に、まだ一つの慈善病院もないとは一体何事か。およそ人間の何よりの苦しみは、貧乏の上に病気になることだ。何としても慈善病院をこしらえねばならぬ」と言って、自ら発起人になってこの計画を強力に推し進めたのである。

幸い、多くの有志者（皇族、華族、資産家、医師ら）から貴重な寄付金の申し出があり、また華族夫人らがつくった婦人慈善会は、鹿鳴館でしばしば慈善バザーをひらいたりして病院の建設、運営に協力した。とくに同病院看護婦教育所の設立はこの婦人慈善会の援助によるものであった。有志共立東京病院という病院名には、この病院がこれら多くのボランティアによってつくられたという意味がこめられていたのである。後に病院名は東京慈恵医院、東京慈恵会医院と変わるが、このボランティア精神だけは変わることがなかった。

兼寛の患者中心主義は、このような社会的な大きな問題から、患者一人一人の問題にいたるまで広くゆきわたっていた。明治大正のころはまだ立会いと称して、患者が主治医の診療に疑問をもったときは別の医者に立会ってもらい、二人でその診療をたしかめるという風習がのこっていた。ただ多くの場合は、“別の医者”は主治医のメンツを立て、その場を繕うことが多かったらしい。ところが兼寛

が立会いをたのまれると、彼の患者中心主義は徹底したもので、主治医の立場を少しも仮借せず、無遠慮にその手落ちなども喋ってしまうので、主治医としては患者の前で赤面せざるを得ないこともしばしばあったといわれる。だから兼寛と立会うのは試験官の前に出るほど怖かったともいわれる。兼寛にしてみればべつに勿体ぶるわけではなく、患者を正しく診療することの方が主治医のメンツを守るよりはるかに大事であったのである。

兼寛にはまた、豪快な風貌には似合わず、患者の心のひだまで診るような繊細なところがあった。ある夏、彼は鎌倉の華族夫人を往診していたことがあったが、それは進行した胃がん患者であった。兼寛はしかしその病名をだれにも告げることをせず、往診のつど「涼くなれば良くなるでしょう」と、同じことをくり返すばかりであった。業をにやした主人は、当時飛ぶ鳥も落とす勢いのあった東大の青山胤通教授にあらためて診察を依頼した。ところが青山は患者を診るなり、「これは胃がんですな」と告げたのである。患者はその日からうつ状態になり、間もなく亡くなったといわれる。兼寛が病名を告げなかったのは、実は患者を慰め、いたわる心からきていたのである。

しかし兼寛にもはっきりがんを告知することもあった。実業家の渋沢栄一の場合がそれである。渋沢はこのように書き残している。「面部にがんを患い悩む。高木先生をわずらわしたるに、悪性なればとて、執刀手術をうく」と。そして手術後、兼寛は「もう再発はしない」と明言したというのである。兼寛にはもちろん完全治癒する自信はあったであろうが、もしそうならなくても、渋沢という人物をよく知る彼には、その後渋沢とよく会話し、希望を与え、一緒にがんと闘っていく自信は十分にあったと思われる。

ある識者の言葉に、「教養」とは「人の心が分かる心のこと」とい

うのがあるが、兼寛には患者一人一人の心の痛みを理解する広い「教養」があったのではなかろうか。彼が慈恵の学生に「明徳会」なる人間教育講座を開いて教えたかったのも、実はこのような相手の心を理解し共感する優しい「教養」であったと思われる。